



K:DNA——創立132年目を迎えた国学院大学の「遺 伝 子」… 個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

國學院大學学報

●発行 国学院大学 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目 ●電話 03(5466)0130 ●FAX 03(5466)0528
●E-mail kouho@kokugakuin.ac.jp ●URL www.kokugakuin.ac.jp
●編集 総合企画部広報課/学生アドバイザーメディアチーム[森淳(チーフ・経営3)/加瀬詩織(外文3)/高村孟司(法3)/福沢孝子(日文3)/
落合遥香(法2)/田中啓友(経2)/土橋菜央(法2)/平野玉葉(経2)]

その他主要記事の掲載面

- P.2——●若木が丘だより
●K-Club Activities「ワンダーフォーゲル部」
●院友ネットワーク
「日刊スポーツ記者・保坂恭子さん」
P.2・3——●NEWS & TOPICS
P.3——●文系解体新書「経済学部・宮下雄治准教授」
●潜入! 国大生24時! 「竹内岳君(経ネ4)」
P.4——●突撃!! 学生記者! 「大学を支える縁の下力持ち」
●こくびゅんのおさんぽ「チェリーロード」
●浜たま奥の細道「ハチ公前献血ルーム」
●編集後記

父の日は、 日々の感謝を込めて プレゼントを

■父の日の定番プレゼントって…?

今回、私たちは父の日に関するアンケートを、4月7日から11日まで本学の学生支援システム「K-SMAPY」を使い実施。学部生11,160人のうち1,112人から回答を得た(回答率10%、誤差:±0.05%、信頼度95%)。アンケートでは、父の日・母の日にどのようなプレゼントを贈っているかや、学生の父・母への思いを探った。

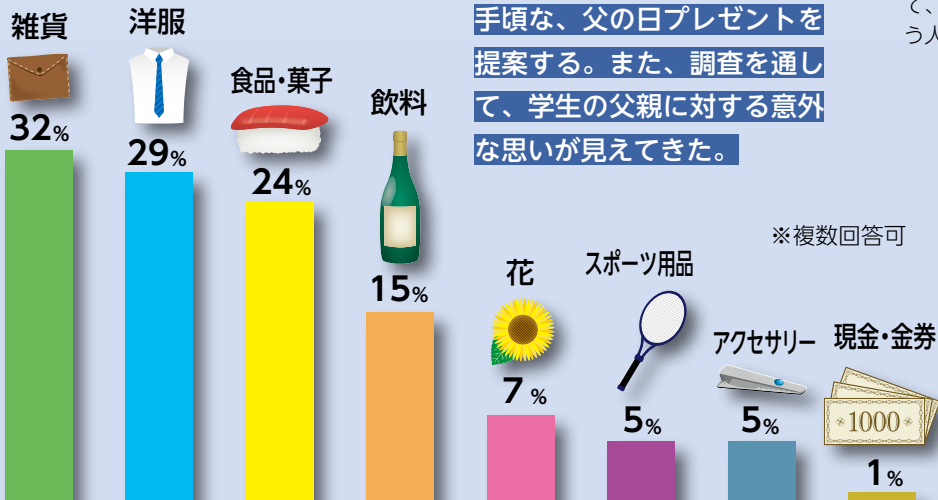
昨年の父の日「プレゼントを贈った」と答えた人は全体の約30%。その中で、贈ったプレゼントの内訳を見ると、雑貨・洋服、食品・菓子などがそれぞれ2割から3割を占め(下図参照)、プレゼントとして花を贈ると答えた人が多数であった母の日と比べ、父の日は回答にバラつきがあり、定番のプレゼントがないようだった。また、「プレゼントを贈った」と回答した人が30%であったのに対し、「特に行動をしない」という人は48%で、プレゼントを贈る人が少ないこともうかがえた。父の日の贈り物に何か良いアドバイスがあれば、プレゼントを贈る人が増えるのではないだろうか。

■今年の東急ハンズのオススメ!

私たちは、父の日に感謝の思いを込めたプレゼントを贈る人が増えてほしいと考え、バラエティ豊かな商品を取りそろえる東急ハンズ渋谷店に、今年の父の日のオススメ商品を聞いた。

今回取材に協力してもらった東急ハンズの広報担当者は、プレゼントを贈られる今どきのお父さんの傾向について、「ご自分の持ち物や趣味にこだわりを持ったお父さんが多い」と話す。そのため、お父さんの趣味・嗜好に対応できる逸品をセレクトしてもらった。

まずオススメを聞く上で重視したのがプレゼントにかけられる予算だ。私たちが行った調査では3,000円未満と答えた学生が最も多く73%。これは他社が実施した社会人を含めた調査と比較すると、学生は社会人と比べて、限られた予算の中でプレゼントを購入していることが分かった。そこで今回は、東急ハンズに、3,000円程度の予算で買える商品3点を紹



皆さんは、日頃の感謝を相手に伝えられているだろうか。5月の母の日には、定番ギフトのカーネーションと共に感謝を伝える人が多い。そして、6月の第3日曜日は「父の日」だ。今回私たちは、父の日が本学の学生の中でどのように意識されているのかのアンケートを実施した。また、アンケート結果を基に、渋谷に店舗を構える東急ハンズに今年の父の日のオススメ商品を聞くことで、学生たちに手頃な、父の日プレゼントを提案する。また、調査を通して、学生の父親に対する意外な思いが見えてきた。

お知らせ

「さくらのちみつ」を
5名様にプレゼント

アンケートに回答してくださった方の中から抽選で5人の方に本学たまプラーザキャンパスで活動する「万葉エコBeeプロジェクト」(詳細は4面に記載)が採取した、「さくらのちみつ(非売品)」をプレゼントします(締切: 6月30日(月))。①今号で面白かった記事の感想、②プレゼントキーワード(〇〇〇〇〇のおさんぽ(ヒントは本紙4面))、住所、氏名、所属(在学生(学科・学年)、保護者、院友(本学卒業生)、本学・本法人教職員、その他のいずれか)を明記の上、ハガキ・FAX・Eメールで国学院大学広報課(連絡先は1面上記参照)までお送りください。また、QRコードからEメール作成画面を開くことができます。
なお、当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
お送りいただいた方の個人情報は法令に基づいて取り扱います。



介してもらった。

オススメ商品の1つ目は、使い続けるほど味わいが出る牛革のブックカバー「テネレッツァTZ-3 BKソフト レザーブックカバー文庫版」(2,300円・税別)。読書が好きな男性に人気があり、「通勤電車の中では読書」というお父さんに愛用されること間違いなしの一品だ。2つ目は、艶出し用のハイポリッシュが入った本格的な靴磨きセット「M.モウブレイ セントパトリックセット」(3,000円・税別)だ。働くお父さんの必需品である革靴を、この機会に感謝の気持ちを込めてきれいに磨き上げてみるのも良いかもしれない。3つ目は「メタリックナノパズル 東京スカイツリー」(1,000円・税別)だ。手のひらサイズのミニチュアモデルの世界を楽しめ、ミニチュア好きのお父さんには最適な一品だろう。ぜひ、お父さんのこだわりを探り、それに合ったプレゼントを探してみてください。

■お父さんに「ありがとう」を

アンケートで「父の日」は特に何もしない」と答える人が多い中、意外なほど気持ちが「ほっこり」するようなコメントが数多く寄せられた。「いつもありがとう! 今年は母の日だけでなく、父の日もあげるからね!」「今まで愛してもらっている分、私も両親をもっと大切にしたいです」「毎年何かできるといいな。ものだけでなく」。恥ずかしくて、なかなか感謝の言葉を両親に伝えられないという人も多い。照れくさいかもしれないが、毎年父の日には何もしないという人も、電話やメールで「ありがとう」と伝えるだけでもお父さんはきっと喜ぶはず。

その他



22%

今回取材に協力してもらった東急ハンズ渋谷店は、渋谷駅から徒歩7分。学校帰りにプレゼントを選びに、足を運んでみるのも良いかもしれない。今年の父の日は、皆さんの家庭ならではの1日を過ごしてみたいかだろうか。

《記事》平野 《企画》高村・平野

スマホをかざすと動画が見られる



- 1 iPhoneは「App Store」、Android端末は「Google Play」を開き「検索」をタップ。
- 2 検索窓に「かざすんAR」と入力し検索。
- 3 検索結果から「かざすんAR」を選択します。
- 4 《iPhone》「無料」ボタンを押すと「インストール」と表示され、インストールボタンをタップするとパスワード入力画面が表示されます。ご自分の「Apple ID」とパスワードを入力し「OK」ボ

- タンを押すと、自動的にインストールされます。
- 《Android》「インストール」ボタンをタップするとダウンロードが始まり「インストール済み」と表示されると完了です。
- 5 位置情報を利用しますか?と表示されるので「OK」ボタンを押します。数秒立ってカメラモードになり、画像を読み取れるようになります。

ご利用端末について

- ◇iOS 4以上を搭載したiPhone、iPadおよびAndroid OS2.2以上を搭載したAndroidに対応しています(一部対応していない端末もあります)。
- ◇ダウンロードは無料ですが、通信に費用がかかる場合があります。
- ◇通信環境によって、写真にかざした後、コンテンツが再生されるまで時間がかかる場合があります。



QRコードを読み込める機種では左のQRコードからかざすんARの無料アプリを入手できます。



左のマークが付いた写真などにスマホをかざしてみよう



K-Club Activities No. 005

ワンダーフォーゲル部

自然という「非日常」を楽しむ

本学ワンダーフォーゲル部は、登山やスキーなどを通してキャンパスでは体感できない自然を楽しむことができる部会である。

今年創部60周年を迎える同部では、現在2つの悩みを抱えている。それは「活動内容の認知度が低いこと」と「女子部員が少ないこと」。そこで今回は、主将の黒田秀紀君(史3)に、2つの悩みとその解決に向けた取り組みについて話を聞いた。

合宿で親睦を深める

ワンダーフォーゲル部の主な活動は、登山やスキーなどの野外活動である。毎週水曜日に渋谷キャンパスの部室で合宿の打ち合わせなどを行っている。授業期間中は、土日を利用して関東近辺の山登りやバーベキューを楽しむ、長期休暇中には、日本アルプスの縦走に挑戦するなど、日本各地を旅している。また、冬季には群馬県川場村で毎年スキー合宿を行い、同部所有の山小屋に宿泊、部員同士の親睦を深めている。

部員は4年生10人、3年生6人、2年生12人、1年生11人の計39人で、「合宿



が多く、24時間一緒にいるので、仲間の良い面も悪い面も見えてしまう。それを知った上で、相手との距離がより縮まることがある」と黒田さんは話す。

驚いたことに同部では、登山経験者は少なく、大学から始めた人が多いそうだ。部員は、最初の登山で頂上に到達したときの達成感と、雄大な自然を肌で感じることで、登山の楽しさを知るといふ。

もっと知ってもらいたい

ワンダーフォーゲル部には、340人を超えるOBOGがいて、今もなお、在学生との交流が盛んに行われている。所有する山小屋もOBOGが土地の確保から建設まで行った。今年は、創部60周年記念パーティーが開催される予定で、ますます活気づいている。

このように歴史ある同部であるが、在学生に対する認知度がまだまだ低いと黒田さんは言う。そこで今年は、昨年までより、勧誘活動に力を入れた。勧誘期間には、部員総出でピザを配り、ブースを作り、丁寧に説明をした。また、ホームページや

若葉の候も過ぎ、季節が夏に移ろうとしている。今年の春は寒さが長引いた印象があるせいか、皆春の風と陽の光を求めているのかもしれない。昼時の渋谷キャンパスでは、初夏の風に吹かれながら、校舎前のベンチや正門近くの石段に座ってお昼を食べる学生たちをよく見かける。いや、そういう学生で溢れかえっている。所狭しと居並んで楽しそうに、しかし幾分窮屈そうに、思い思いにお昼を食べている。そのちよつとみっともなくもくつろいだ様子に、就職難民ならぬ「昼食難民」という名が思い浮かんだ。

あるいはこの春の混雑ぶりは、体育館跡地の新設工事が原因かもしれない。体育館前の階段という広いランチスポットが失われた分、昼食時の人口密度が上がり、残された快適なランチスポットは取り合いとなり、結果難民が発生しているのかもしれない。

ここでふと、自分が学生であったときの昼食はどのように食べていたのかが気になり、薄くなりかけた記憶をたどってみた。たまプラーザキャンパス

若木が丘の「昼食難民」



の日当たりのいい芝生に腰を下ろしてコストパフォーマンス抜群の「プールパン」をぱくついたり。氷川神社下の公園のベンチでコンビニのおにぎりを食べたり。生協でお湯を入れたカップラーメンを今は無き大学院棟前の階段に座ってかきこんだり。なんだ、自分も立派にみっともなくもくつろいだ「昼食難民」だったんじゃないか。そういえば盛夏を迎えて野外での昼食がなくなってくる頃には、新たに友人もでき、空き教室や部室、ラウンジなど、空いている場所を見つければ上手になって、だんだんとみな「昼の居場所」を確保するようになっていったと思う。

「昼食難民」は春限定の風景、新学期の風物詩なのかもしれない。

飯倉義之(学生部委員・文学部助教)

SNSを利用して同部の活動内容や新入生募集、歓迎会の告知を随時更新した。おかげで歓迎会には多くの新入生が集まり、その大半が入部を決めた。

自分たちの活動をもっと知ってもらいたいという部員の気持ちが実を結び、少しずつ認知されているようだ。

女子部員求む！

同部のもう1つの悩みは、女子部員が少ないこと。もちろん男子部員の入部も大歓迎だが、「登山中の部員への声掛けなどの気遣いや合宿の計画づくりでは、女子部員の方が頼りになります。現に4人の幹部の

うち、私を除く3人が女子部員です」と黒田さんは話す。

しかし、現在の女子部員数は5人と圧倒的に少ない。毎年、登山を散策程度に考え、合宿中の食事や水回りを気にして、入部をやめる女子学生が多いそうだ。

黒田さんは「まず、山を登ることで四季折々の自然が楽しめることを知ってほしい。少しでも興味が湧いたら、ぜひ入部してほしい」と切実に話していた。

残念ながら今年の新入生勧誘期間には、女子部員の入部はなかった。「女子部員が少ない」という悩みは、継続中だが、認知度が上がりつつある同部の活動に注目したい。《記事》森《写真》福沢

「情報の最前線で働く」

日刊スポーツ新聞社 記者

4年に一度のスポーツの祭典、オリンピック。2月にロシア・ソチで開かれた冬季五輪は、今年日本中を熱くさせたイベントの一つとして記憶に新しい。そのソチ五輪の現場から、日刊スポーツ新聞社の記者として雪上の熱き戦いを伝えた保坂恭子さん(平22卒・118期史)。今回、これまでの記者としての経験や、ソチ五輪での体験について話を聞いた。

記者として働く

平成22年に日刊スポーツ新聞社に入社した保坂さん。入社当時は、事業部でイベント関係の仕事を希望していたため、スポーツ部に記者として配属が決まったときはとても驚いたという。

入社当初から高校野球やJリーグの担当記者としての経験を積み、昨年ソチ五輪の担当に選ばれた。このように聞くと、順調に記者としてのキャリアを積んでいるように見えるが、決して平坦な道のりではなかったそうだ。スポーツ新聞の花形ともいえるスポーツ部の中で働くことに対し、不安もあった。配属当初は記事を書くことに慣れておらず、短い原稿でも何時間もかけて書いていた。もし記事が書けなかったら、新聞が完成しないかもしれないというプレッシャーもあった。

スポーツの経験が全くなかった保坂さんは、多くのスポーツのルールや選手を覚え

ることに苦労した。忙しい合間を縫って、新聞やテレビのニュースで、一人勉強を重ねた。そして、記者として大切な事前準備、「取材対象者の経歴や人柄などの情報を頭に入れ、取材現場で臨機応変に質問できるようにすることが大切」だと保坂さんは話す。取材対象者を知ることで、取材をスムーズに行い、より内面を引き出すことができるのだ。

選手と共に成長したソチ五輪

今年の2月、日本中を熱くさせたソチ五輪。開催まで1年に迫ったある日、保坂さんは上司に呼ばれ、「会議でソチ五輪の担当に決定した」と突然言われた。その後パスポートを持っていくかと聞かれ、「本当に行くのだな」と実感したという。

日刊スポーツ新聞社の東京本社スポーツ部からソチ五輪に取材のため現地入りしたのは、わずか3人。さらに女性の記者は保坂さんだけだった。

保坂さんは主にフリースタイルスキーなどの雪上の競技を担当した。今回のソチ五輪で最も印象に残ったシーンは、「上村愛子選手が惜しくもメダルを逃した女子モーグル決勝」であると彼女は答えた。ソチ五輪開催前から上村選手を追いかけて、最も苦手としていたターン技術の修得に向けた血のにじむような努力や、結婚とその後の長期休養からの復帰の軌跡などを目の当たりにし、同じ女性として頑張る上村選手に、なんとしてもメダルを獲得してほしいといった強い感情が生まれた。しかし結果は無念の4位。沈む気持ちを奮い起こしながら取材を続ける保坂さんの前で笑顔を見せる上村選手は印象的で、そこに1つの大仕事をやり遂げたアスリートの姿が見えたと言った。

今までの仕事の中で一番やりがいを感じたことは何かと尋ねると、保坂さんは「1面を任されたこと」と語った。新聞にとって1面は顔。私たち学生記者も編集長から1面を任せると言われたら、いつも以上に気合が入るものである。全ての記者の期待を背負い記事を書く、まさにエースの称号と言ってもよいかもしれない。しかし、保坂さんは任されたことではなく、記事を読んだ周囲の人から「良く書けている」と褒められたときに最も喜びを感じたそうだ。自分の書いた記事が読者に伝わっていることが実感できたときに初めて喜びを感じる。私たちも記者のはしくれとして、彼女の記者としての誇りを少し感じる事ができた瞬間だった。

院友 ネットワーク

未来に向けて

保坂さんは今後の目標を「女性ならではの視点で、自分にしか書けない記事を書くこと」と語った。現在同社スポーツ部には女性記者は2人しかいない。そうした世界で働く彼女ならではの言葉だ。実際に保坂さんの書いた記事は表現が優しく、読んでいて温かい気持ちになる。

6年後には東京五輪が開催される。保坂さんの視線はすでに東京五輪に向いていた。今回のソチ五輪という大舞台での経験が生かされるだろう。ソチ五輪での体験を糧にし、保坂さんらしい記事が東京五輪のときにも読めることに期待したい。今後の保坂さんの活躍に注目だ。

《記事》土橋《企画》落合

保坂 恭子さん



今年1月、カナダでスキーW杯

国際交流歓迎会

5月8日午後6時から、本学渋谷キャンパス若木タワー有栖川宮記念ホールで今年度から本学で学ぶ留学生たちのための国際交流歓迎会が行われた。滞在は、半年間もしくは1年間の予定で、韓国・イタリアなどから来日した招聘研究者1人と学部・大

学院の留学生18人が学んでいる。今回の会には、昨年度より引き続き本学で学ぶ留学生や彼らの日本での生活をサポートするK-STEPアシスタント、国際活動サークル「cha×cha」に所属する学生が参加し、新しい仲間を温かく迎え入れた。

開会のあいさつ・乾杯の後、歓談の時間に。留学生と日本人学生が、笑顔で交流を楽しむ様子を見られた。また、歓迎会では

恒例の大クイズ大会も行われ、留学生・日本人学生混合のチームでクイズに解答。留学生の母国に関するクイズもあり、留学生と日本人学生が助け合いながら1問1問を乗り越えていた。留学生には、本学学生と交流を深めながら、母国では得られない大切なひと時を過ごせることを期待したい。《記事》落合《写真》平野





経済学部 宮下 雄治准教授

消費増税をどう乗り越える？

今年4月1日から消費税率が8%に引き上げられた。私たちの身近なところでも、一部の公共交通機関でICカードと切符とで料金が異なる「二重運賃」が導入され、町なかでは税率改定による商品の値上げが多く見られるなど、至る所で変化が起きている。今回の消費増税によって、今後の消費の動きはどのように変化していくのだろうか。マーケティングを専門とする本学経済学部の宮下雄治准教授に、消費者と企業の双方から見た増税直後の消費動向と、今後起こりうる消費者や経済全体への影響について話を聞いた。

企業に求めるマーケティング

今回行われた消費増税によって、実際に私たちの消費生活にはさまざまな変化が起きた。今回の消費増税による影響として、多くの業界で4月第1週目は売上げが前年比でマイナスを記録した。しかし、スーパーや家電量販店では第2週目から落ち込み幅が改善。予想より早い回復ではあるが、17年前の増税ではいったん回復の兆しが見えた個人消費が、再びマイナスに転じている。こうした事態を招かないためにも、「企業には、消費動向の変化を十分に精査し、需要変動への対応力を高めていくマーケティングが求められる」と宮下准教授は話す。

消費者の需要はどう変わる？

各種メディアの報道に見られるよう

に、百貨店や自動車販売店などの高額商品を販売する業種では、税率引き上げ直前に購買力が高まる「駆け込み需要」の反動により売上げが落ち込むなど、今回の消費増税の引き上げによる影響が表れ始めている。宮下准教授は、この「反動減」が夏頃まで続くと言っている。夏のボーナス商戦が本格化する6月後半までに、各企業がどこまで需要を喚起できるかが勝負になるという。

一方でこの春、大企業を中心に賃金値上げの動きが見られ、労働者（消費者）の中には使えるお金が増えたという人もいる。それに対し、一部の企業では増税分を価格に転嫁することが困難で、賃金値上げには踏み切れていないことも事実だ。増税を受けて、消費者の間では、引き続き「低価格志向」や「節約志向」が維持されていくだろう。しかしその反

面、消費者が購買意欲を我慢し続けるには限界がある。我慢を続けるだけでなく、時には多少高額でも欲しいモノ・コトにお金を使うという「メリハリ消費」を行うようになると予想される。

増税が企業に課した課題

消費税率が3%から5%へ引き上げられた17年前の平成9年は、増税後の消費の落ち込みがなかなか回復せず、景気が悪化の局面に転じる「景気の腰折れ」状態となった。また、この年に起きたアジア通貨危機や国内の金融機関の相次ぐ破綻が引き金となり、約20年間にわたるデフレ経済が続いてきた。

17年前のように国内外で予想外の経済問題が相次いで発生すると、再び経済状況の悪化は避けられなくなるかもしれない。今回、その不安要素の1つとし



て、中国経済の減速を危惧している。輸出入で中国経済への依存度を高めている日本経済にとって、企業全体が影響を受ける懸念があるのだ。

消費を喚起する立場の企業が17年前のこの舞を演じることなく、デフレ経済の脱却に近づきつつある。宮下准教授は、日本経済が、消費増税というマイナス要素をどのように乗り越えるのかに注目している。「企業にとっての最重要課題は、増税後の消費者の需要に適切したマーケティングの展開をし、不測の事態が発生してもそれに惑わされないことである」と宮下准教授は話した。

《記事》落合《写真》加瀬

潜入! 国大生24時!

なった竹内岳君（経ネ4）は、選手としてではなくマネージャーとして陰でチームを支える。部や部員のために毎日どのような活動をしているのか、そしてチームを支える今の気持ちについて話を聞くため、硬式野球部の合宿所へ潜入した。

選手からマネージャーへ



福沢：竹内さんは、現在主務として硬式野球部で活動されていますが、主務とは部の中でどのような役割なのですか？

竹内：簡単にいうと、マネージャーのリーダーであり、チームの責任者です。マネージャーにはグラウンドや寮の中でさまざまな仕事があり、それらを統括する役割です。主務は、マネージャーとして活動してきた上級生の中から選ばれます。

福沢：竹内さんは、最初からマネージャーだったのですか？

竹内：いいえ、僕は小学校から高校まで硬式野球で投手としてプレーしていたので、選手として入部しました。ですが、1年生の夏にけがをして思うようにプレーできなくなってしまったため、マネージャーの道を決意しました。

田中：選手からマネージャーになることに、抵抗はありませんでしたか？

4月、今年の東都大学野球春季リーグが始まった。昨年のエースと4番が抜け、新しい顔ぶれでスタートした本学硬式野球部。今年はどのような活躍を見せてくれるのか楽しみだ。昨年10月に同部の主務と

竹内：マネージャーへの転向は、監督からの勧めもありましたが、最初は選手として部にいたいという気持ちが強く、悩みました。

福沢：マネージャーになる決め手になったことは何だったのですか？

竹内：マネージャーの先輩の姿を見たことです。選手は、「試合に出たい」「うまくなりたい」という明確な目的があるため、その一点に集中しています。反面、マネー

「日本一」へチームを支える日々

ジャーは選手という立場から一歩引いているためか、全体を見ることが出来ます。自分がけがをする前から感じていたことなのですが、選手をケアし、グラウンドへ送り出す先輩の姿を見て、人としてかっこいいと思ったことが、マネージャーになる決断をした大きなきっかけです。

選手たちの支えとなる

福沢：チーム全体を見る仕事とはどのようなことですか？

竹内：まずは、選手の様子を気にかけることですね。毎朝、体調のチェックをするのですが、選手の多くは多少具合が悪くても練習をしたいために無理をしようとします。時には選手を説得し、休ませることも

マネージャーの仕事です。

また、選手がグラウンドに行くとき、寮の出入り口を出ていく選手の表情やあいさつの雰囲気や体調の判断をすることもあります。

福沢：それだけで判断できるのですか！？

竹内：はい、僕は基本的に寮の出入り口にある受付で電話対応などの細かい仕事をしているので、必然的に選手が練習に行くときや、終わって帰ってきたときの様子をほぼ毎日見ることになります。そのためか、普段と雰囲気の違う部員がいると「何かあったのかな」と感じるようになりました。そのときは、積極的に声をかけるように心がけています。

福沢：選手たちは悩みなどを話してくれますか？

竹内：体調や気持ちの面での相談が多いですが、マネージャーは監督やコーチなどの指導者に一番近い部員であるため、選手か

ら指導者とのコミュニケーションについて相談されることもよくあります。

平野：相談されたとき、どのように対応するか迷ってしまうことはないですか？

竹内：ありますね。しかし、せっかく自分を頼ってくれたのだから、状況を詳しく聞くなどして、無責任な対応にならないよう気をつけています。

平野：本学硬式野球部にとって、竹内さんは大きな支えですね。

竹内：チームのために自分には何ができるのかを考えて毎日活動しています。

チームのためにできること

田中：自分の時間の多くを割いて、チームに貢献する理由は何ですか？

竹内：僕の高校時代の野球部は、あまり強くありませんでした。そのため、本学の硬式野球部という現実的に日本一を目指せるチームに入ることができ、そのチームの支えとして活動できることが何よりも嬉しいです。選手のケアなど、自分が仕事として日々行っていることがチームの勝利へつながっていると思うと、やりがいも感じます。

福沢：選手のために頑張っていることが、竹内さん自身の喜びにもなるということですね。

竹内：そうですね。このチームでは選手もマネージャーも関係なく、いつも「日本一」を目指す気持ちは一つです。そのために皆が、自分には何ができるのかを常に考えています。

福沢：竹内さんは、今後どのようにチームを支えていきたいですか？

竹内：今僕は、チームの中にいながらも、客観的な視点でチームを見ることのできる立場にいます。なので、部員への気遣いを常にしていくことと、チームの雰囲気作りをしていきたいです。試合に出ることは無いけれど、目標に向けて必死になる気持ちは、僕も選手たちも変わりません。チーム一丸となって意識を高く持てるよう、率先して呼びかけたり、行動で見せたりしていきたいと考えています。

《取材》福沢・田中・平野

《記事》福沢《写真》田中



リーグ戦初完封の田中君

NEWS&TOPICS

平成26年度東都大学野球
春季1部リーグ

～対駒沢大学戦～

東都大学野球春季1部リーグは、4月に開幕。本学は、開幕カードで勝ち点を落としたが、次の拓殖大学からは勝ち点1を獲得し

続けている。5月6日時点で本学はリーグ3位。この日は、午前10時30分から上位を争う2位駒沢大学との1回戦が行われた。

本学の先発投手・田中大輝君（史4）は、安定した立ち上がりで試合の流れをつくる。試合が動いたのは4回表、2番小木曾亮君（健体4）が四球で出塁。相手の失策などをからめ好機を作ると続く3番柴田竜拓君（経2）の内野ゴロの間に先制。さ

らに田中君の力投に応えたい打線は6回表、相手のミスなどで2死2、3塁の好機を作ると5番櫻吉宏樹君（経営3）が内野安打を打ち1点を追加した。8回にも櫻吉君が、この日2本目となる適時打、続く7番井村滋君（日文4）が適時打で続き、4-0で試合を決定付けた。

終わってみれば、先発の田中大輝投手は9回を投げ5安打完封。翌日の2回戦も5-2で勝ち、勝ち点を手にした。

《記事》田中《写真》福沢





大学を支える 縁の下の力持ち

皆さんはキャンパス内で働く清掃作業員を見かけたことはあるだろうか。見かけたことはあっても、どんな人がどのように掃除をしているかを気にかけたことがある人は少ないのではないか。果たして彼らは、渋谷キャンパスを日々どのようにきれいに掃除しているのか。そこには、単なる「掃除」という2文字では片付けることのできない、仕事に対する情熱があった。



より良い掃除を考え、日々試行錯誤

今回は、本学の清掃に携わって6年目を迎え、全体の統括を行うベテランの川村行男さんに話を聞いた。

清掃作業員（清掃員）の朝は早い。4月10日午前6時30分、私たち学生記者は、裏方として渋谷キャンパスを支える清掃員の仕事を調査するため、早朝の渋谷キャンパスに集合した。最初は、120周年記念1・2号館と3号館の教室、トイレ、そして学術メディアセンター（AMC）内を掃除する。これら施設は、学生が多くなる午前8時30分頃には清掃を終わらせなければならない。そのため、毎朝午前6時から掃除が始められているのだ。

清掃員3人で構成されたAMC専属の

チームが1つと、それ以外の施設は、5～6人で構成された3つのチームで掃除をしている。チーム内では各自の役割が決められていて、3人が教室（黒板、机と椅子、床）、2人が廊下とトイレの清掃をすることとなっている。この体制は決まった時間内で清掃を終わらせるにはギリギリの人数だという。川村さんは「現在の掃除システムは、他の清掃員と話し合い、コストや最低限の人員、作業効率を考えて試行錯誤した結果、成り立っています」と話す。しかし、大きな枠組みは決まっていながらも、個々の掃除の進め方を細かく決めることはできない。それぞれの清掃員が、担当の場所を一番きれいにするという高い意識のもと、最も効率の良い方法を日々考えながら実践しているのである。

「机の中」に要注意！

今回私たちは、1号館4階の掃除を体験取材した。最初に、机の中にゴミや落し物が無いか確認し分別する。次に椅子・机の整頓をしながら、はたきで机の上のゴミを落とす。その後、ゴミ拾い用のモップで床のゴミを集め、靴底のゴムが擦れた跡を、別のモップを使い、足裏で踏むように擦っていく。このように、1つの教室で6つの工程をこなさなければならない。2時間半で1号館の全ての教室を回するためには、1教室を平均6分で終わらせなければならない。今回は、清掃員の方に手伝っていただいたにもかかわらず、1号館4階の1フロアだけで40分もかかった。

「掃除はただきれいにするだけではなく、時間との戦いでもあります。しかし、1つでも工程を省いてしまうと教室に入ったときに、きれいだと感じてもらえなくなってしまう」と川村さんは話す。そして、掃除中に一番目についたものは、机の中のゴミである。特にペットボトルや食べ物のゴミが多く、中には手帳やまだ使えるルーブリーフもあった。

机の掃除を担当する清掃員さんは「忘れ



清掃体験をする学生記者(左)

物をしないためにも、教室を出るときは必ず机の中を確認してほしいです。そしてゴミは机の中ではなく、ゴミ箱へ捨ててほしい」と話した。

体験取材前に清掃員の掃除を見て、私たちが強く感じたことは「チームワーク」であった。彼らは決して他の担当場所には手を出さず、自分の持ち場を素早く掃除する。そして、お互いの掃除を邪魔しないように相手の掃除の進め方を熟知し、ペースを合わせる。このように清掃員間での信頼と呼吸の合わせ方が、限られた時間内での掃除をするうえで欠かせないものであると感じた。

「掃除」されていることのありがたさ

今回の取材を通じて私たちは、大学だけに限らず、家やお店などの公共空間が、常にきれいに掃除されていることのありがたさを再認識した。普段から掃除されているのは当たり前と考える人や、日常生活を送る場所が毎日掃除されていることを意識していない人も多いかもしれない。しかし、川村さんは「私たち清掃員は、学生のことを第一に考えて仕事を行っています。大学の主役は学生です。失礼や邪魔にならないよう、あくまで裏方の仕事として取り組んでいます」と話す。

使った椅子を元に戻す、ゴミはゴミ箱へ捨てる。当たり前のことではあるが、わずかなことを意識することが、私たち学生から清掃員へ日頃の感謝を伝える1つの方法ではないかと思う。

《記事》高村 《写真》福沢



チェリーロード

満開の遊歩道

春になると満開の桜が咲き誇る美しい遊歩道。本学たまプラーザキャンパス内を通る遊歩道沿いには多くのソメイヨシノが植えられ、通称「チェリーロード」と呼ばれている。今回は、満開の桜が新入生を迎えるこのチェリーロードを訪れた。

キャンパスを彩る桜色

今年、横浜市は平年より3日早い3月31日に桜の満開宣言があった。学内に咲く桜も4月1日には、ほぼ満開となり、チェリーロードを歩くと、鮮やかな桜色が一面に広がった。キャンパス内には、普段の大学生活ではあまり見かけることがない地域に住む子ども連れの家族が多く訪れ、子どもたちは、桜の木の下で元気にしゃべっていた。今年は、4月の第2週に葉桜となってしまったが、ぜひ来年は、たくさんの桜の花びらと在学学生や子どもの笑顔によって美しく彩られる本学のチェリーロードを訪れてほしい。

味覚から、さくらを

同キャンパスでは、「万葉エコBeeプロジェクト」という地域住民と共に自然環境を考えるための養蜂活動が学生を中心に行われている。毎年この時

写真にスマホをかざすと、チェリーロードの動画がご覧になります。



期には、チェリーロードの桜の香りに誘われたミツバチが集めたハチミツからもほんのり桜の香りが漂う。飽きのこない甘みが特徴だ。今回、本紙1面に記載されているアンケートの回答者の中から抽選で5人に「さくらのほちみつ」をプレゼントする。ぜひ、たまプラーザキャンパスの桜を味と香りからも楽しんでほしい。

《記事》平野 《写真》加瀬

《映像》田中

ハチ公前献血ルーム

本学渋谷キャンパスの最寄り駅であるJR渋谷駅ハチ公口改札から徒歩数分。渋谷駅の目の前に日本赤十字社東京都赤十字献血センターハチ公前献血ルームはある。同献血ルームがあるビルの前はとても人通りが多いが、献血ルームに一步足を踏み入れると、白を基調とした清潔感のある空間が広がり、渋谷の街の喧騒からは想像できないほどである。

ハチ公前献血ルームは、平成20年にオープン。現在、献血ルームにおける献血者満足度を向上させる活動が全国的に順次行われている。居心地の良い空間を作ることは、献血後の体調不良を防ぐことにも効果的なのだ。ハチ公前献血ルームはその先駆的存在となっている。

献血は、16歳から69歳の健康な人なら気軽に参加できるボランティア活動である。献血製剤においては、安定した供給をすることが重要だが、輸血用血液製剤の一つである血小板製剤の有効期限は採血後4日間である。また一度献血を行うと、血液の成分が回復するまでの期間を考慮し、最短でも2週間は期間を空けなければ次の献血をすることができない。安定した供給には多くの人の協力が必要なのだ。

日本赤十字社の発表によると、大学生を含めた20代の献血人口は平成6年の200万人超から、平成25年には約半分の100万人程度にまで減少している。一方、高齢化などの影響で血液需要の増加が見込まれている。そのため日本赤十字社では、若年層向けのイベントを行い、献血人口増加のためのさまざまな工夫を凝らしている。ハチ公前献血ルーム所長の中島寿芳さんは「少しでも多くの人に、献血に関心を持ってもらいたい」と語る。

本学渋谷キャンパスには、例年2回体育連合会が主催して献血バスが訪れる。今年の1回目は、6月5日(休)と翌6日(金)の2日間行われる予定だ。献血をしたことがない人も、献血に参加してみたいかがだろうか。また、学校帰りや買い物の途中などにハチ公前献血ルームに気軽に足を運んでみるのもよいだろう。

《記事》土橋 《写真》加瀬



編集後記



「感謝を込めて」

今号は、1面の「父の日特集」からはじまり、「突撃!! 学生記者!」の清掃員や、「潜入! 国大生24時!」の硬式野球部竹内主務など、さまざまなシーンの「感謝」を伝える号となりました。今回は「こくびんのおさんぽ」で、映像の中に登場するこくびんのキャラクター弁当を作りました。私は普段、料理を一切しないため、下準備は母に手伝ってもらい、当日は早朝5時に起床。慣れない包丁の扱いに苦戦しながら作りました。当たり前のよう

に母に作ってもらっていたお弁当を自分で作ってみると、初めて母の苦労が分かった気がします。

今回1面に記載されている「父の日特集」では「学生の親子関係に関するアンケート」を実施し、父の日に日頃の感謝を伝える人がいた反面、何もしないという人が多くいることが分かりました。私も、ここ数年、父の日に父へプレゼントや感謝を伝えていませんでした。父の日に関する取材をしたことをきっかけに、私も両親へ感謝の気持ちを伝えたいと思っています。

また、読者の皆さまへ日頃の感謝の思い

を込めて、今年度からアンケート回答者への読者プレゼントが変わりました。各号で紹介した話題にちなんだものを贈ります。春号は、こくびんのおさんぽのチェリーロードから万葉エコBeeプロジェクトの「さくらのほちみつ」です。詳しくは1面をご覧ください。

この春入学したフレッシュな新入生から、社会人目の4年生。自分の心情や、伝える相手によって感謝の気持ちは十人十色。この春号が、皆さまの感謝を伝えるきっかけとなれば幸いです。

(平野)